

カウンセリング過程の研究

—— カウンセラー発言とクライアント発言の対応関係を中心として ——

南蒲原郡栄村立大面中学校教諭 白井 稔

はじめに

最近のカウンセリングの中心課題は、「技術」より脱却して、カウンセラーの「態度」にあるといわれている。C. R. ロジャーズの提唱した「非指示的カウンセリング」の発展のプロセスを眺めても、非指示的→来談者中心的→経験主義的→実存主義的 というように修飾語が変わってきていて、カウンセリングの条件としてカウンセラーの自己一致、クライアントを無条件で積極的に尊重しようとする態度、そうして共感的理解への努力などが最も重要視されている。

では、「カウンセラーとしての態度」を形成するにはどうすればよいか。社会心理学者ニューカムは、「態度は明らかに自分たちの経験の結果である」「人の事物に対する態度は、その人の準拠枠によって決定されることは、事実もはや公理的である」、従って「いずれの場合でも、態度の推移は、準拠枠の変化いかんである」と述べている。これは、人がある事物に対する態度を変えた場合、おそらく、その人はこれまでとは別の準拠枠でそれを知覚しつつあるのだといってもさしつかえないことになる。一方「学習」においては、認識構造を変化させることにより知覚を変えうる。その知覚変容は準拠枠を変化させる要因の1つとなりうると考えられよう。つまり、「カウンセリング技術の学習」は「カウンセラーとしての態度の形成」の重要な要因であると考えられる。

個人は事物を知覚するための習慣的な準拠枠をもちやすく、態度は固定化しやすい。このような態度の変容には大きな抵抗があるが、カウンセラーとしての態度を形成するために、その重要な要因である「カウンセリングの技術」を研究し、学びたいと思うものである。

I 研究目的

上述のごとく「技術」と「態度」の関係を考え、次の目的を設定する。

- 1 クライアント中心的カウンセリングの理解
- 2 カウンセラーとしての技術・態度の習得

II 研究内容

目的達成の手段として次のごとき項目について検討する。

- 1 これまでのおもな研究と研修員（筆者）実施のカウンセリングとを比較検討する。

- (1) カウンセリングの方法——カウンセラー範ちゅう
継続的カウンセリングにおけるカウンセラー発言応答の傾向
- (2) 治療過程——クライアント範ちゅう
継続的カウンセリングにおけるクライアントの陳述応答の変化とその傾向

- 2 カウンセラー範ちゅうとクライアント範ちゅうの対応関係傾向
カウンセラー発言とその直後におけるクライアントの陳述応答の傾向

III 研究方法

1 方法

W. J. スナイダーは、1945年に「非指示的心理療法の性格に関する研究」という論文を発表しているが、ここで用いられた方法——カウンセラーの活動の範ちゅうとクライアントの反応の範ちゅうを作成して発言分析を行なった——は、面接資料の組織的な分析にきわめて効果的なものであった。本研究においてはスナイダーの研究などと比較するために、彼の範ちゅうを修正することなく利用することにした。

2 範ちゅうおよびその定義

紙面の都合上省略

なお、詳細は伊東博訳編「カウンセリングの基礎」（誠信書房）参照のこと。

〈表1〉 カウンセリング過程の5等分部におけるカウンセラー
範ちゆうの分布 (%)

範ちゆう	1	2	3	4	5	計	スナイ ダー	シー マン
リード								
場面構成	.46	1.35	2.52	4.67	1.64	1.88	3.6	1.2
展開の強制							.7	.2
直接的質問	.46				3.28	.78	5.7	.4
指示的リ ード	.91	2.70			.82	.78	2.2	.8
(小計)	(1.83)	(4.05)	(2.52)	(4.67)	(5.74)	(3.44)	(1.22)	(2.6)
非指示的								
簡単な反応	8.03	6.74	3.24	6.80	5.80	7.04	7.45	6.7
内容の繰返 し	7.76	1.35	1.58	2.80	2.45	6.23	3.4	15.2
感情の明瞭 化	8.68	6.77	1.34	1.93	7.38	10.15	7.16	6.31
(小計)	(9.68)	(9.46)	(8.65)	(8.57)	(8.68)	(9.09)	(6.26)	(85.0)
半指示的								
解釈							(8.1)	(1.2)
指示的								
是認・激励							4.7	.05
情報・説明	.46			3.82	.82	.94	1.7	1.4
行動の提示							.2	.05
説得							1.9	
否認・批評					.82	.15	.9	.2
(小計)	(.46)			(3.82)	(1.64)	(1.09)	(9.4)	(1.7)
周辺の								
面接の終結			2.52	3.82	3.82	2.34	3.6	2.8
関係の終結			3.36		1.64	.31	.6	.3
社会的会話	.91		4.20	1.91	.82	1.56	1.2	1.0
類別不能		1.35	.84			.31	2.3	5.4
(小計)	(.91)	(1.35)	(1.09)	(5.73)	(5.74)	(4.52)	(7.7)	(9.5)
計	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00	10.00
頻数	219	74	119	107	122	641	3636	3453

資料となる対象事例には初期及び終期の面接が含まれるのを原則とするが、この研修期間に、その原則を含む2事例を得ることができた。1つは38才の母親、他は45才の父親についてであり、両事例とも録音され、記録されて各範ちゆうに分類された。なお、分類の基礎としては、スナイダーと同様にB. J. コブナーの「観念分割」の方法を用いたが、類別作業は筆者が行ない、ついで当研究所相談室のカウンセラーによって検討が加えられ、より高い信頼度が得られるように努めた。

〈資料例〉(事例62より抜萃)

- C35 わたくし自身それはよくわかるんです。自分でこういうことは決めるべきことであるよね。(YUI, PAS)
- T35 自分で決めなければならない。(XRC)
- C36 わかるの。しかし、いろいろ考えてみれば両方同じウェイトなものですからね。わたくしの気持を決められない。(ハア)結局ねサイコロをふってでて来たその結果によって選ぶということでもしなければ決められないんです。(YAC, YSP, XSA, ...)

IV 結果とその考察

本研究で得られた結果は、3種類の表に集計された。(表1, 表2, 表3)そして、結果に意味を与えるために χ^2 検定を行なった。この方法では、多くの集団が同時に比較され、しかも各資料と他のすべての資料との相互関係をも示されるのである。以下考察を試みる。

1 カウンセラーの技術に関する考察 (要約)

(1) カウンセリングの方法 カウンセラー範ちゆう (要約)

ここでは、本研究の対象事例となったカウンセリングの性格は技術的にみてどのような特性があるか、それはスナイダー、シーマンの研究と比較してどのような差異があるかという点で検討された。

- a カウンセラーの技術的検討については、スナイダー、シーマンの結果と比較して、前者とは有意な差があったが、後者とはその非指示的技術の使用法が接近しており、有意な差はみられなかった。
- b 本研究では非指示的範ちゆうに属する発言が90.95%であり、スナイダー、シーマンより量的に増加していた。そして、他の範ちゆうは逆にスナイダー、シーマンの結果よりも減少しているところから、本研究の対象事例がロジ

$$\chi^2 = 6.41 \{ 0.7452 - 1 \} = 1.633268$$

$$n = (4 - 1)(5 - 1) = 12$$

$$P = 0.05 \text{ は } 2.82995$$

従って危険率5%で有意差あり

ヤーズの原理に照合して、その発言に関する限りにおいて、クライアント中心のカウンセリングの技術的特性を示すものであると言えよう。

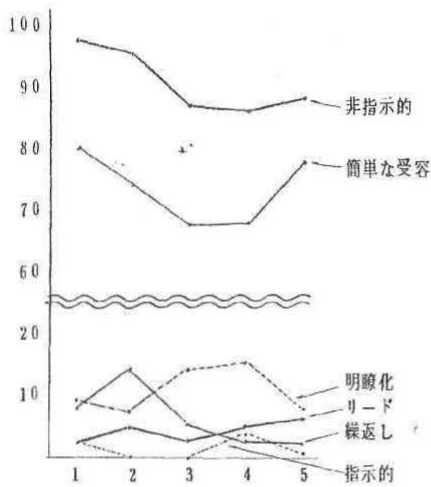
c 本研究の非指示的範ちゆうにおけるひん数の分布は、スナイダー、シーマンの結果と逆になっている。すなわち、スナイダーからシーマンに移行する間に見られた傾向は「簡単な受容」が減少し、それに代わって「内容の繰返し」と「感情の明瞭化」が増加していたことであった。しかし本研究にあつては、「簡単な受容」のひん数が発言総数の

74.57%を占めていたのである。この点、どちらが効果的かは簡単には言えないが、3「対応関係の考察」と関連づけて後述したい。

(2) 過程におけるカウンセラー発言の推移 (要約)

ここにおいては全カウンセリング時間を等間隔になるように5分する5等分法の立場で分析を行なった。これを図表化した

〈図1〉



カウンセラー各範ちゅうの推移

のが〈図1〉であるが、対象事例が少ないのが原因してか、カウンセリング過程の進行に伴う技術の使用の推移には明確な一定の傾向は認められない。しかし、しいて言うならば、クライアントの「問題の叙述」が漸減する傾向にあるとともに、カウンセラーの「簡単な受容」のひん数も漸減の傾向をたどり、クライアントの「理解・洞察」「計画・決心」の漸増の傾向とともに、カウンセラーの「感情の明瞭化」もその傾向がうかがわれた。

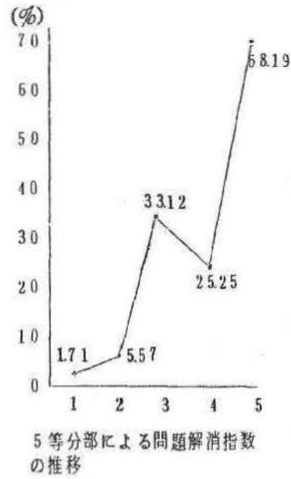
2 治療過程に関する考察

—クライアント範ちゅう (要約)—

前項においてカウンセラー範ちゅうの分析・考察を試みたのであるが、次にカウンセリング過程の進行につれてクライアントの発言がどのように変化するか、その推移を〈表2〉により概観する。

- (1) 治療過程には、明瞭な、記述しうる推移がみられた。すなわち、「問題の叙述」は治療過程を通じて一貫して減少を示し、「理解・洞察」は治療過程の進行に伴い増加を示し、「計画・決心・計画の話合い」は治療過程の終期・カウンセリング関係の終結直前に出現している。このことは、ロジャーズが言う「カウンセリングは予測可能なプロセスである」ことを実証している。
- (2) カウンセリング過程の治療的推移を検討するために「問題解消指数(治療指数)」を算出したが、〈図2〉の通り指数は上昇していると同時にその上昇率も治療過程を通じて増加しているこ

〈図2〉



5等分部による問題解消指数の推移

とがわかる。これはクライアントが自ら問題を解消しつつあることを意味しているが、カウンセリングの効果を評価する際の資料の一つとなろう。

- (3) クライアントの感情範ちゅうにおいて治療過程をみると、カウンセリング初期において否定的叙述が多く、後期に至って肯定的叙述の割合が増加し、これに理解・洞察、計画・決心の話合いが伴っていることは、ロジ

〈表2〉 カウンセリング過程の5等分部におけるクライアント範ちゅうの推移 (%)

範ちゅう	1	2	3	4	5	計	シ-マ
問題の叙述	44.21	43.90	31.88	31.82	15.21	35.64	(42.6)
簡単な反応	4.65	17.07	7.25	7.94	2.38	6.84	
忠告・情報	0.77				8.72	1.42	
質問に対する応答	47.28	34.15	27.84	30.97	27.61	36.46	
簡単な受容と熟慮	0.77	2.44	1.45	4.60		1.71	
明瞭化・解釈の拒否							
(小計)	(5.437)	(5.366)	(3.654)	(4.351)	(3.871)	(46.43)	(35.8)
理解・計画							
理解・洞察	0.77	2.44	15.79	10.61	17.40	8.01	10.0
計画・決心					15.23	1.92	2.6
(小計)	0.77	2.44	15.79	10.61	32.60	9.93	12.6
周辺の							
面接の終結			5.80	7.94	2.38	2.85	
関係の終結					8.72	1.17	
社会的会話	1.55		8.54	4.60	2.38	3.42	
類別不能			1.45	1.52		0.59	
(小計)	(1.55)	(-)	(15.79)	(14.06)	(13.48)	(8.03)	(9.0)
計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
頻数	129	41	69	66	46	351	5,422
肯定的態度							
対自己	2.436	4.76	27.25	27.78	47.82	26.24	
対カウンセラー場面		9.53	4.58	2.78		2.46	
対他人場面	6.41	14.25	13.62	2.78	8.70	8.43	
(小計)	(3.077)	(28.54)	(45.45)	(33.34)	(56.52)	(37.13)	(39.1)

範ちゆう	1	2	3	4	5	計	シマツ
否定的態度							
対自己	255.4	238.1	250.0	138.9	217.4	227.7	
対カウンセラー場面	25.6	47.6		24.99		5.95	
対他人場面	230.8	428.8	295.5	277.8	173.9	267.3	
(小計)	(512.8)	(714.5)	(545.5)	(666.6)	(391.3)	(554.5)	(54.1)
両向的態度							
対自己	153.9				4.35	6.45	
対カウンセラー場面							
対他人場面	25.6					.97	
(小計)	(179.5)	(-)	(-)	(-)	(4.35)	(7.42)	(6.8)
計	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00	100.00
頻数	78	21	44	36	23	202	888

$$\chi^2 = \{ 1.2159 - 1 \} = 6.57809$$

$$n = 12 \quad P > 0.005 \quad \text{有意差あり}$$

ャーズの指摘する治療段階(カタルシス→洞察の達成→終結の段階)を経過していることを、再度実証したことになる。

3 カウンセラー範ちゆうとクライアント範ちゆうの対応関係傾向についての考察

カウンセラーの技術がクライアントに対してどのような心理学的機能をもっているかを考察する手がかりとして、カウンセラーの発言の直後に続くクライアントの発言が、それぞれカウンセラー範ちゆう及びクライアント範ちゆうに分類され、それが相互に対応するように集計され、対応する個々のひん数の全体に対する χ^2 検定がなされた。〔表3〕

全体の対応関係をみる χ^2 検定の結果、危険率1%で各ひん数間に有意差があった。さらにこのことを裏づけるためにひん数が各欄に均等に出現する可能性の連合係数Cを算出したが、 $C = .197$ となりその可能性は少ないこと、すなわち、あるいくつかの欄にひん数が集中する傾向が認められ、結局 χ^2 検定の結果と一致した。

〔図3〕は表3よりつくられたものである。このリード範ちゆうの内容を表1でみると、場面構成がその約55%を占めていることから、リード範ちゆうが簡単な受容を導くことは当然のことである。次いで問題の叙述を導き、忠告や情報の要求を導くことも自然の流れといえよう。クライアントは悩みの解消を目的に来談するのだから。しかしこれには明瞭な対応関係があるとは断言できない。

〔図4〕は非指示的範ちゆうの簡単な受容についてである。スナイダーは「問題の叙述はカウンセラーの簡単な受容のあとには

〔表3〕 カウンセラー発言に連続するクライアント反応の傾向

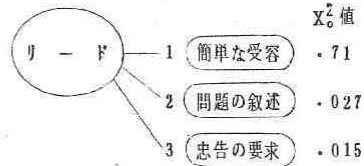
クライアント カウンセラー	問題叙述	忠告情報 の要求、 応答	簡単な受容	拒否	理解・計画	周辺の 計画的	計
リード	8	6	13		1		28
非指示的	61	8	1		13		83
指示的	25	2	26	1	2		56
周辺の	21	2	57	4	15		99
計	123	26	102	5	38	22	316

$$\chi^2 = N \left\{ \sum \frac{f_{ij}^2}{T_i \cdot T_j} - 1 \right\} = 40.69272$$

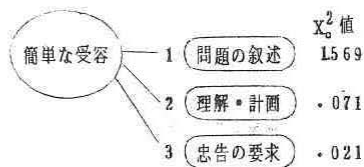
$$n = 30 \quad (\text{頻数による})$$

$$P = 0.001 \text{ は } 5.08992 \quad P > 0.01 \quad \text{有意差あり}$$

〔図3〕 リード範ちゆうとの対応



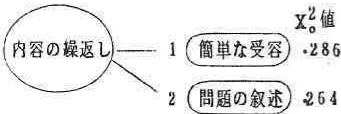
〔図4〕 簡単な受容との対応



起こらない」といっているが本研究では、この2つの範ちゆうの対応関係は全体の中で一番関係の深いことを示している。スナイダーの言葉を合わせて考察するならば、簡単な受容は問題の叙述を導くのではなく、促進する傾向があるということになる。また、カウンセリングの過程が進行するに伴い、理解・洞察、計画・決心が出現することになると、簡単な受容は理解・洞察の深化にプラスの関係をもってくる。しかし、ここに注意しなければならないことが生じてくる。それは、簡単な受容が多数回連続使用されると、クライアントが依存的感情をいだく傾向が生じてくるということである。この現われが忠告や情報の要求の出現である。このような場合には、クライアントにカウンセリング場面に対する不信の念が生じやすくなる。こういう場合には、他の範ちゆう——できるだけ非指示的範ちゆうが望ましい——をより多く用いなければならない。このように考えてみると、前述のスナイダー、シマンの研究で簡単な受容が少なく、内容の繰返し・感情の明瞭

化が高率を示していることがうなづかれるのである。

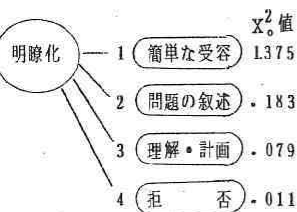
〈図5〉 内容の繰返しとの対応



〈図5〉は同じく非指示的範ちゅうの内容の繰返しとクライアント範ちゅうとの対応関係である。

これによると、内容の繰返しは、結局クライアントの発言をそのまま客観的な性格を付加して、クライアントに返してやるのであるから、クライアントに簡単な受容が多くなるのは当然で、またその返ってきた自己の発言内容によって、積極的にでも消極的にでも、自己理解が促進されるために、問題の叙述の表明を促すものと考えられる。

〈図6〉 感情の明瞭化との対応

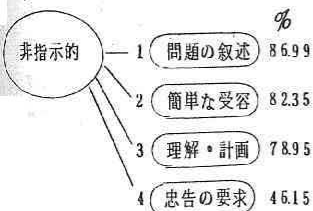


〈図6〉は感情の明瞭化とクライアント範ちゅうを示したものである。ここで言うことは、感情の明瞭化はクライアントによって簡単な受容として表明される傾向がきわめて

強いということである。しかし、ここで指摘しなければならないことは、この技術を用いる場合、常に慎重にクライアントの感情を共感的に理解する努力を続けなければならないということである。もしもこの時、クライアントの内部的準拠枠についての共感的理解ができていないならば、図6の4のように明瞭化や解釈の拒否が生ずるのである。このことはカウンセラーの態度が問題になろう。また、感情の明瞭化は、ある程度、問題の叙述を導き、理解・洞察の促進に役立つ傾向がみられる。このことについてスナイダーは、「感情の明瞭化はあまり洞察や理解を生み出すものではないようである」と述べているが、本研究においては、理解・洞察、計画・決意はどのカウンセラー範ちゅうよりも多く、カウンセラーの感情の明瞭化のあとに続いて起こっていることはかなりはっきりしている。

以上の非指示的範ちゅうに対応するクライアントの範ちゅうの傾向をまとめてみると〈図7〉のようになる。図のパーセンテージはそれぞれクライアント範ちゅうの

〈図7〉非指示的範ちゅうとの対応

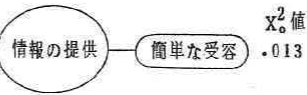


ひん数における非指示的対応ひん数の割合である。全体的にみるとクライアントの総発言

ひん数のうち75.3%がこの非指示的範ちゅうに続いて出現しているのである。なかでも特に問題の叙述は簡単な受容によって促進され、内容の繰返しと感情の明瞭化は簡単な受容または明瞭化の受容・黙認となつてあらわれる。すなわち、自己概念を理解し再構成する機会を与え、さらに感情の明瞭化と簡単な受容によって理解・洞察へと導かれ、計画・決心へ移行していくとみることができよう。

このように非指示的範ちゅうを考察してみると、クライアント中心的カウンセリングはカウンセラー技術の非指示的範ちゅうのみでじゅうぶんであるとの推論も許されるようである。また、本研究において対象とされたカウンセリング事例は、ロジャーズの仮説「すべての個人は成長への衝動をもちそなえている」を実証したと言えよう。

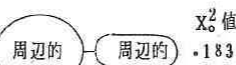
〈図8〉 指示的範ちゅうとの対応



〈図8〉は、図7の非指示的範ちゅうの考察に対し、非指示的範ちゅうがクライアントにどのように作用するかをみようとしたものである。しかし、この事例がロジャーズのいう原理にかなって

いたため情報の提供のはかは出現しなかった。したがって、ここでは情報の提供と対応するクライアント範ちゅうを見ることになるが、情報の提供は、クライアント中心的カウンセリングの立場より、忠告や情報の要求に続いてなされる場合が普通で、またその時のクライアントの心理状態はカウンセラーに依存的であることも考え合わせると、情報の提供に続いて簡単な受容が出現する可能性が強いのも自然であろう。

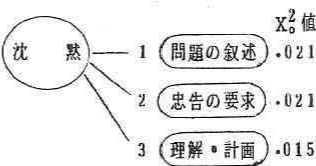
〈図9〉 周辺の範ちゅうとの対応



〈図9〉は周辺の範ちゅうに対応するクライアント範ちゅうを求めたものである。これを表3と

合わせてみると、周辺の範ちゅうに属するカウンセラー発言に対応するクライアント発言は、クライアントの周辺の範ちゅう以外にはほとんどないことがわかる。これは周辺の範ちゅうの内容からでもわかるように、社交的会話はそれと同類の会話を生み出す傾向があるといえよう。

〈図10〉 沈黙に続く範ちゅう



考察の最後に、クライアントの沈黙に続くクライアント発言の傾向をとりあげてみる。沈黙は往々にして、カウンセラーの叙述内容の繰返し・要約によ

って断たれる傾向があるが、クライアントが沈黙を破って発言する場合は〈図10〉のような傾向がみられた。

すなわち、治療過程の前半においては、沈黙は問題の叙述や忠告・情報の要求で破られ、後半はその後に理解・洞察、計画・決心が出現する傾向があると言えよう。したがって、沈黙は非常に大切な場面であり、それが治療期間の終結に近い程、問題の叙述が減少し、カタルシス段階が過ぎたころから沈黙は特に尊重されカウンセラーの発言によってクライエントの沈黙を破るようなことは慎まなければならない。

「沈黙」について、ロビンソンはそれを4種類に分けている。

- (1) 構成的休止；クライエントが考えがまとまらないための沈黙で、この沈黙場面は自分の考えをまとめようとするもの。
- (2) 正常な休止；クライエントがある問題感情を叙述し終わって、カウンセラーの反応を待っているいわゆる休息。
- (3) 懇願的休止；クライエントがカウンセラーの反応、つまりカウンセラーに承認・忠告・助言を求めているもの。
- (4) 拒否的・逃避的休止；クライエントの一種のためらいの気持ち、カウンセラーに対する不信任、問題解決の意欲の喪失・あきらめの気持ちからの抵抗感による沈黙。

これらの沈黙について伊東博氏は「沈黙や休止の場合は、クライエントが何かを考え、あるいは考えているのであるから、彼の思考や感情の過程を妨害しない方がよいであろう」と述べているが全くそのとおりである。しかし、その直後に同氏は「一般的にいつて、カウンセラーは、沈黙や休止を恐れる必要はないけれども、同時にまた、沈黙や休止を破ることを恐れる必要もない」と述べている。氏はこれ以上のことは言っていないけれども、ここには治療過程というものを考えているようなニュアンスは感じられない。カウンセラーが沈黙を破ることの是非は複雑な要因があつて一概には言えないが、本研究の結果より言えることは、前述したように、治療過程の初期における沈黙——これは主として「拒否的・逃避的休止」「懇願的休止」「正常な休止」であろう——に対しては、沈黙が始まる直前のクライエントの発言を繰返し、要約し、感情を明瞭化してやることによって破つてもよいが、治療過程が進行するにつれて出現する沈黙——それは大部分が「構成的休止」であろうから、カウンセラーはこの沈黙場面をじっくりと尊重し、この沈黙中におけるクライエントの努力が、図10でみるように、理解・洞察、計画・決心に進展するように妨害してはならないということである。

V 結論

本研究は、クライエント中心のカウンセリングを理解し、その技術・態度を習得することを目的にして、カウンセリングの実際的場面を記録して、カウンセリング過程を分析的に考察してきた。ここでそれを項目別に要約して結論とする。

1 カウンセリングの方法について

χ^2 検定の結果、スナイダーの研究との間に有意差が認められたが、この差がカウンセリング技術の本質的な差であるかは疑わしい。むしろ、非指示的範ちゆうに発言が集中しているという事実は、カウンセリング技術に高い一貫性があることを実証し、ロジャーズ理論からして、本質的な差はなかったといえよう。しかし、少しでも相異点を指摘するならば「非指示的技術の純化」という傾向から、スナイダーの研究が「非指示的カウンセリング」を対象としたのに対して、シーマン及び本研究は「クライエント中心のカウンセリング」を対象としたということである。

2 カウンセラーの技術について

カウンセリングの技術・方法は、カウンセリングの過程に伴う首尾一貫した変化の型は認められず、複雑な条件を含んだ恣意(しい)的な変動がうかがわれた。

3 治療過程について

本研究の対象事例におけるクライエントは、問題の叙述に始まり、理解・洞察にはいり、計画・決心をしていくというロジャーズの予測するプロセスの流れ、そのままに変化した。これはクライエントの当初の問題が解消したということだけでなく、クライエント中心のカウンセリングの結果として、知覚構造の変容が起こりつつあったといえよう。

4 発言対応関係傾向について

- (1) クライエントの高度な情緒的な反応を導くカウンセラー発言は何か？を考察した結果、非指示的範ちゆうに属する発言がカウンセリングのキーポイントであることを実証した。
- (2) 特に目立つ対応関係を示したのは、「簡単な叙述」がクライエントの問題の叙述、理解・洞察、計画・決心を促進させ、同様に「内容の繰返し」がクライエントの問題の叙述を促がしクライエントに自己を客観的に眺める機会を提供し、「感情の明瞭化」が前二者を合わせた機能をもつということである。したがって、「感情の明瞭化」が最も大切なものである。しかしこのことはクライエントを深く共感的に理解するという基本的条件が満たされなければ、単なる小手先の技術に終始して、クライエントの防衛機制を刺激することにもなりかねないことに留意しなければならない。
- (3) 過度の「簡単な受容」に対して「内容の繰返し」「感情の

明瞭化]が少ない場合は、クライアントをしてカウンセラー依存的態度に追いやる危険性があると考えられる。この点、スナイダー、シーマンの研究等を参考とする今後の研究が必要である。

(4) 最後に、「沈黙」はカウンセリング過程の初期においてはクライアントに問題の叙述や忠告・情報の要求を出現させ、過程の後期においては、クライアントに理解・洞察、計画・決心を促進させる傾向がある。したがって、カウンセラーは「沈黙」に対して常に尊重的であり、その間のクライアントの心理状態に敏感でなければならないといえる。

この研修をとおして、まず自己の教師としての在り方を反省させられ、「教育」（教授のみでない）の質の向上のためには、このカウンセラーの態度を教師たるものすべて学ばなければならないと痛感した。これはあたかも進路指導の研究が学級担任教師に強く要求されているのと同様である。

「われわれに与えられた課題は何か」

全校職員の共通理解もさることながら、まず、着実に実践し、実証することであると考えるのである。

最後に、この長期研修の機会を与えてくださった関係機関及び諸先生方に深く感謝の意を表するものである。

おわりに

これまで何気なく生徒に話しかけてきた言葉をいまここに思い浮かべてみると、耐えがたい戦りつを覚えるのである。

“何という指導意識の強さ!!”

生徒が「うまく発言しない」「自主性がない」……など教師側にも大いに原因がありそうである。

参考文献

- 「カウンセリングの基礎」 伊東博訳編 誠信書房 1960年
「カウンセリングと心理療法」 伊東博訳 誠信書房 1962年
「学校カウンセリング」 伊東博監修 誠信書房 1963年
「心理療法の技術」 鈴木清編 日本文化科学社 1961年 他